

八木健に学ぶ滑稽俳句 4

高橋 素子

エアコンか扇風機かとうちわ揉め 八木健

猛烈に暑い。うだる日本列島。掲出の句は、エアコン・扇風機・団扇にかけた何とも面白い師の滑稽句である。「熱中症」が叫ばれているこの夏、無理なく賢く猛暑の夏を乗り切って行きたい。

涼しさや人さまざまの不恰好 正岡子規

「六月無礼」という言葉がある。陰暦六月の酷暑の時期に服装が多少乱れても、その無礼をとがめることなく大目に見てもらえとの意の味わい深い古語である。

師・八木健はこの「六月無礼」を地で行くような滑稽句を詠んでいる。

節電や六月無礼を毎月に 八木健

飄々と生きるステテコの軽さかな 八木健

団扇一枚サトーハチロウのクールビズ 八木健

究極のクールビズ全裸に熱くなる 八木健

師匠自らの推敲によりどんどん面白い滑稽句に変身している。

ところで、「協会報」の一面に、師匠が七七をつけて、短歌的に面白く句評して下さるコーナーがあるが、私も師匠の句に七七をつけてみる。

ステテコやよくぞ男に生まれたる 八木健

という師の句に「女にスカートあるを知らずに」と

続けてみる。昔、「暮しの手帖」の編集長・花森安治がスカートの涼しさに感激。スカート姿で街を歩く写真姿は、今もって記憶に新しい。

「六月無礼」で遊んでばかりもいられないので、古来名句と言われる句と師・八木健の滑稽句を比較検討してみたい。

暑き日を海にいれたり最上川 松尾芭蕉

音たてる海に入水の夜這星 八木健

芭蕉の句の「暑き日」については、暑い一日なのか、太陽なのか説が分かれている。「暑い一日説」の人々は、重層的表現を好む芭蕉の作風を根拠に挙げている。最上川が暑い一日を海に流し入れたという時間的経過と、暑い一日から解放され夕景にくつろげたという心理的経過が詠まれた句だという。

一方「太陽説」をとる人々は、最上川河口に大きく開けた海原に太陽が沈む…そのダイナミックな一瞬の眺望を賛して詠んだ句と解釈する。

「一日だと観念ですが、太陽ですと視覚的、絵画的です。この句の作者は『熱々の太陽は海に沈めたぞ』と言ってるわけですね。その詠みっぷりが「軽み」なのです」と、師匠は「太陽説」をとる。

「俳句は瞬間を詠むもの、俳句は言葉のスナップ写真だ」と語る師・八木健の見事な解説である。

師匠の句も、打ち返す暗い海に流星が吸い込まれてゆく壮大な情景の瞬間を聴覚的・絵画的に詠んだ佳句である。「夜這星が入水の時に大袈裟にも音をたてるというのですから、滑稽でしょう」と、師匠は語る。

老僧の骨刺しに来る藪蚊かな 高浜虚子

河原の痩せコスモスの咲にけり 八木健

痩せた骨ばかりの僧に血などなく、全く間抜けな蚊である。「骨刺しに来る」と上手い表現を用いながら、この藪蚊を哀れんでいるかの様な虚子の姿が面白い。

同じ様に哀れみの心を、師・八木健は河原の痩せ地に生えたコスモスに向けている。ひよろひよろのコスモスが無事に花を咲かせたことを喜んで、人一倍温かい目を向けているのである。小学校時代虚弱体質であった師匠が、これもコスモスという対象に自らを重ねて詠んだ句と言えよう。

裸子をひつさげ歩く温泉の廊下 高浜虚子

裸子を取り逃がしたる警察官 八木健

朦々と湯気の立つ温泉は、子供心には地獄の釜を見る如く怖い。無理矢理服を脱がされても死に物狂いで逃げる。でも所詮は子供。取り押さえられ、まるで物体の如く吊り下げられて、運ばれて行く情景を、虚子は面白く句に詠んでいる。

師匠の句は「裏切りの句」である。犯人や逃亡者を捕まえる仕事のプロが、我が子に逃げられている。なんとも面白く見事な滑稽句の佳句である。

秋風に歩行(あるい)て逃げる蛍かな 小林一茶

ゆびさきをのがれしほたるゆびのうら 八木健

一茶の句は秋の蛍への哀憐の情を詠んだだけではない。この句が身動きも出来ぬ病床に臥していた一茶の「病中吟」であることを思うと、一層哀愁の感が深い。

師匠・八木健の句は追われると、暗い側に逃げる蛍の習性を詠んだ写生句であるが、全て「ひらがな」で書かれている。「蛍の動きは、カタカナでなくひらがなのですね。山頭火にも、てふてふひらひらいらかをこえた」という平仮名の句がありますが、彼も蝶に同じ動きを発見したようですね。結局、運よく野原に捨てられ『人間は川の水よりも甘いぞ』と、蛍のひと言」などと、師匠の冗句は衰えるところがない。